

夢野久作『押絵の奇蹟』における「遺伝」

(要旨)

國松 春佳

夢野久作『押絵の奇蹟』（『新青年』昭和4年1月）は、結核を患うピアニスト・井の口トシ子が、歌舞伎役者・中村半次郎に宛てて書いた恋文として構成された書簡体小説である。トシ子はこの手紙の中で、自分たちが不義密通によって生まれた生き別れの双子の兄妹ではないことを証明し、「あなたのお父様と私のお母様が、死ぬまでお隠しになった恋が、お兄様（半次郎）と私とによって遂げられなければならぬ運命」を語ろうとしている。

先行研究では、本作品は「運命」に翻弄される主人公を描いた物語として、『あやかしの鼓』（大正15年）や『ドグラ・マグラ』（昭和10年）と共に「因縁話」の系統に位置づけられてきた。また、トシ子が母親の潔白を証明するために依拠した「法医学夜話」という本に記された視覚的胎教については、同時代（昭和4年前後）の小説や医学書との比較により、「迷信と科学の習合のような周縁的な言説」であったことが指摘されている。

本発表では、先行研究においてその定義が曖昧なまま論じられてきた「運命」という言葉に注目し、『押絵の奇蹟』を「因縁話」として読む従来の枠組みを再検討する。また、作品の時代設定と発表時期に隔たりがあることを踏まえ、発表当時（昭和4年）ではなく、トシ子が手紙を書いた明治35年前後の「遺伝」言説を参照し、先行研究とは異なる条件のもとで分析を行う。

「運命」という言葉は、一般的には「宿命」「因縁」とも似た「人間の意志では変えることのできない決定されたもの」という意味で用いられる。しかし、『押絵の奇蹟』において、語り手であるトシ子は遺伝によって母親から伝えられた病気や容貌、つまり意志によって抗うことのできない「因縁」を「運命」とは呼ばない。むしろ、それらの

「因縁」から抜け出すためのもの、あるいはそれらを超越する力を持つものとして「運命」を信じているのである。これまで『押絵の奇蹟』は主人公が「自分の意志によって運命をきり拓くのではなく、与えられた物語のなかでもがき苦しむ」「因縁話」として読まれてきたが、むしろ「運命」によって遺伝による「因縁」を克服しようとする物語であると言えるのではないだろうか。

また、トシ子が手紙を書いた明治35年の日本では、ダーウィンの進化論が広く浸透していた一方で、メンデルの遺伝学はまだ再評価されて間もなく、「遺伝」と「因縁」「血筋」といった俗信・迷信的な言葉は明確に区別されていなかった。トシ子が読んだ「法医学夜話」と「遺伝の事を書いた書物」の内容も、当時の「科学」から見ればその信憑性に大きな差はなかったのである。にもかかわらず、遺伝が引き起こした現象を視覚的胎教によって説明しようとするトシ子に狂気性を見出すことができるのは、読者が昭和4年という、既に「遺伝」が「科学」として受容された時代を生きているからに過ぎない。

ある時代には「迷信」だったものが、別の時代には「科学」になり得る。『押絵の奇蹟』は、明治35年を生きる主人公が「迷信」によって「運命」を補強しながら遺伝的な「因縁」に抗う姿を描いており、読者はその姿に、昭和4年以降の「科学」というフィルターを通して狂気を読み取る。しかしそこには、かつて「迷信」だったものを信仰し、「科学」として解釈する彼ら自身に宿る狂気もまた映し出されていたのではないだろうか。

以上のように、本発表では『押絵の奇蹟』における「遺伝」表象に注目し、「運命」という言葉や時代設定の果たす役割を考察する。